

# 博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

令和元年度

京都外国語大学

## はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を目的として、令和 2 年 3 月 14 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏名	五十棲 愛璃乃
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第20号
学位授与の日付	令和2年3月14日
学位授与の条件	本学学位規程第3条3号該当
学位論文題目	ドイツの学生歌の存在意義について －「鎖」という表象－
論文審査委員	主査 教授 元山千歳 副査 教授 菅野瑞治也 副査 名誉教授 浜本隆志（関西大学）

## 論文内容の要旨

学生結社とフリーメイソンリーは、慣習、思想、理念において、人や時代を超えて相互に響きあい繋がりがあいながら今日にいたる。この歴史的事実を、学生歌の歌詞と曲の精緻な分析をもとに実証する。

カウプの先行研究が提示する学生歌の多くは学生結社とフリーメイソンリーに由来する、という主張への反証と確証が本論の中核であり、さらに歴史のなかで変容するドイツ社会と結社との関わり、この組織を作り生きる人たちの相互関係の再構築である。この作業は学生歌の分析によって展開される。

構成は、序章、第1～9章、終章である。

第1章は、現代学生結社によって歌われている学生歌の歌詞と楽譜の分析から、現代学生結社とは何か、さらに学生歌の存在意義を明らかにする。

第2章は、ドイツ学生結社の歴史についてである。何百年以上も前から今日にいたるまでドイツ語圏を中心に活動している学生結社の思想、活動の内容や目的についてである。

第3章は、啓蒙主義の所産についてである。この時代のドイツにフリーメイソンリーは発展していくが、啓蒙主義と結社結成の関係についてである。

第4章は、大学生の位置づけと学生文化についてである。1348年にプラハ大学がドイツ語圏で創設されていらい、啓蒙主義に共感した超エリートの学生は、自由とバンカラを謳歌した。

第5章は、ドイツの学生歌、という本論の核ともなるテーマについてである。その成立を

12世紀頃まで遡ることができる学生歌は、学生結社やフリーメイソンリーと関わっていることをカウプ提言への反証と確証として展開する。

第6章は、学生歌の変遷についてである。激変する時代のなか、さまざまな学生結社の栄枯盛衰とともにその歌詞や楽曲を変えていく学生歌についてである。

第7章は、ベートーベンについてである。学生歌の歌詞に曲をつけたベートーベンと学生結社そしてフリーメイソンリーとの関係についてである。

第8章は、ヴァルトブルクの祝祭、についてである。祝祭にあつて学生歌は歌われ、愛国心が鼓舞された。

第9章は、「すべては鎖で結ばれる」つまり本論の副題「鎖」という表象についてである。時代のなかで変容しつづける学生結社やフリーメイソンリーは、慣習、思想、理念において、時代や人を超えて相互に響き合い繋がりがあいながら今日にいたることを、おもに学生歌の分析と解釈によって実証する。

学生歌は単なる歌詞でも楽曲でもない。学生歌は歌われつづける。合唱されつづける。この歴史的事実において、学生歌は、学生の気根を繋ぐ。中世ヨーロッパを遍歴し、飲む、打つ、買うというバンカラ生活を送った学生、祖国誕生に向かって高揚した学生をはじめ、今日にいたる学生たちを繋ぐ。学生結社やフリーメイソンリーに歴史的に関わってきた作詞作曲家をはじめさまざまな関わりの中で創られてきた学生歌は、時代と世代を超える絆として立ち起こりつづける。

## 口述試問及び審査結果

試問は審査委員と学位請求者との質疑応答として行われた。質疑はおもに質問やコメントであり、おおむね、3領域についてである。論述展開について、学生歌について、学生歌と社会や文化との関わりについてである。

論述展開については、はじめに、9章の鎖という表象についての論述にいたる各章は、有機的な関係として配置されているかどうか。あるいは「伝統の鎖」「結社間の鎖のごときつながり」という表現は、表象としての鎖を的確に論述しているかどうか。ベートーベンの7章において、ややもすると論述は、ベートーベンが結社やフリーメイソンリーの正規会員だったかどうかの論証に向かう傾向にあるが、会員かどうかを実証することは議論すべき本論の主目的ではない。また「いづれにせよ」や「このような」が指示する語句が曖昧なために、論述が円滑に展開されることを妨げているばあいがある。1章を現代の学生結社によって選択され歌われている学生歌からはじめ、9章を鎖について論じたことは、時代と世代を超えてつながる鎖をテーマとする本論文において効果的構成ではあるが、序章での説明が終章で繰り返されるなど、論述展開における課題はあり、さらなる推敲が求められることが確認された。

学生歌については、類似の学生歌について、それぞれの詩や楽曲の成立年代や、相違につ

いての説明が求められた。しかし、とくに日本において先行研究が皆無と云っていい現状にあって、さまざまな視点で展開される文献を批判的に解読し、さらに学生歌の分析と解釈にあっては、正確な日本語訳を試みたことは評価に値する。

学生歌と社会的背景については、たとえばヴァルトブルクの祝祭という歴史的イベントにおいて学生歌が合唱されたが、祖国統一に向かう歴史をつくる契機となる祝祭について、政治社会的な動向、学生歌の作詞や作曲にたずさわった人物たちの政治外交への戦略的な関わりについてのさらなる調査研究が期待される。

以上、論述展開、学生歌について、そして学生歌と社会や文化との関わりという3領域から、質疑応答の内容を記した。審査員の質問やコメントという口述試問に、学位申請者は真摯かつ積極的に対応した。

審査の結果、本学博士の学位を授与するに値すると認められた。